

第一部 夏目漱石とナショナル・アイデンティティ

第一章 別れる理由 漱石の倫敦テキストが語るもの

夏目漱石という名の一人の近代日本人とその文学について考えようとするならば、そのイギリス体験について考えないわけにはいかない。というのも、漱石が残したテキストには、そのほとんどにおいてイギリスがその影を色濃く落としているように思われるからである。漱石は小説だけでなく評論・講演などによる文明批評によっても高く評価されてきたが、その文明批評がイギリス体験あってこそのものであるのは言うまでもなく、小説にもまた文明批評的言葉が少なからず挿入されているのは周知のとおりである。そういう意味では、公にされた漱石の初の文章が「倫敦消息」であったのは偶然ではない。

漱石の作家としての誕生にとってイギリス体験がひとつの原体験とでも言えるものであることはすでに指摘済みのことであるのだが、私はそのことを次のように言いたい。漱石は「倫敦」「西洋」という他者を語ることで書くことを始め、漱石が後に言ったように書くことが「自己の表現」(「文展と芸術」)にほかならないものならば、以後書かれたものは他者を通して創られた「自己」「漱石」にほかならなかったと。

漱石がまだ十代の頃に書かれた日本とイギリスを比較した英文レポートには、日本は「詩的な空、詩的な国土に囲まれ」た「詩的な国民」で、「詩心のある島国の領界に閉じ込められていた」のに比べ、イギリス人は「実際的な国民」で「日本人は散文的なものを詩に転するのに対し、イギリス人は詩を散文に転ずる」と書かれている(「Japan and England in the Sixteenth Century」)。その考えがどこまで漱石独自のものだったのかは確認できないが、まだ見ぬ国に対してのその考えは、イギリスを實際目にしたあとも大枠においては変らなかった。そしてこの言葉は、後述するように、漱石の他者や自己を認識する際のパターンの基本形を現しているといってもいい。

一、 数量化される他者

漱石にとって初めて接する西洋がとてつもなく大きなものと見えていたことはすでに渡航中に残した文章から知ることができる。初めて上陸した地であったナポリにおいて「立

派なる博物館」の中にあった「無数の」彫刻に漱石は「驚き」(明治三十三年十月十八日付日記) パリで見た博覧会も「規模広大にて二日や三日にて容易に観尽せるものにあらず方角さへ分らぬ位」(同十月二十二日付日記)のものだった。そして見物に出て見た「繁華の様」は「夏夜の銀座の景色を五十倍位立派にしたる者」(同)と見え、博物館のみならず美術館もまた「広大にして覧尽され」(同十月二十五日付日記)ないと感じられていたのである。

また漱石は「パリスに来て見れば其繁華なることは亦到底筆紙の及ぶ所に無之、就中道路家屋等の広大なること馬車・電気鉄道・地下鉄道等の網の如くなる有様、誠に世界の大都に御座候」(同十月二十三日付鏡子宛書簡)と語る。

ここでまず注目しておきたいことは、漱石が新しいものを目にする度に「日本」を思い起こし、対象への感想が常に「日本」との比較においてなされていることである。

それは、単に人は自分が知る対象を根拠にしてしかものを考えられないのだからと言って済まされるべき問題ではない。パリの繁華街の様子を目にしながら「銀座の五十倍」というような比較をするような思考のあり方は、漱石にとって新しい対象は常に<比較>を前提にしか語れないものだったということを示す。すなわち目にしたパリの模様は銀座と違う次元のものとしてではなく、つまり文化の差異として意識されるのではなく、何よりも先に規模の違いにおいて認識されているのである。(当然ながら、その際、実際の<差異>に関しては記述されない。)そして、対象が「五十倍」というような数値で計量化される限りそれは必然的に優劣の判断が伴われるだろう。おそらく後述するような、漱石における<遅れ>の認識はここから始まっている。<遅れ>の認識はむしろ進化論をその背景においており、漱石の他者認識は進化論的価値基準にしばられていたと言うべきなのである。

西洋人が背が高いことも漱石においては自らの小さいこととの対比において語られ、大きいことに価値がおかれる。「雀までも大きく」(明治三十四年一月十七日付日記)見えてしまうのはまさにそのような「目」によるものだった。また、数量化されにくいものでも漱石の中ではほとんどの場合、対象は二項対立的な図像としてイメージ化され、比較される。西洋人の「白」さを目のあたりにすると自分の「黄色」いことを意識してしまうのはまさにそのためであり、それが劣等感として認識されるのは、「なりたいものになれない」(小坂井敏晶『異文化受容のパラドックス』、朝日新聞社、1996・10)というような、対象への同一化欲望ゆえのことなのである。

むしろ、「黄色」へのこだわりと劣等感は、漱石自身にその責任があるわけではなく、

西洋人による価値付けによるものである。これに関してはまた後述するが、ともかくも、はじめて異邦に身をおいた漱石の感受性を、「日本人」一般のものとするのはしばらく差し控えておこう。たとえ「なりたい」欲望が一般的なものだったとしても、その一般からはずれる例はいくらでもあるからである。差別の視線がすべての被差別対象に劣等感をもたらすとは限らないのである。ともかくも、漱石の他者に対するまなざしが常に〈比較〉にかけられ、価値付けが行われていたことをとりあえず確認しておきたい。

二、近代主義志向

数量化し得ない事項についての漱石の感じ方をもう少したどっておきたい。たとえば漱石が船の中で目にした「西洋人の子供」は「奇麗にて清潔なること日本人の比に無之、衣服も至極軽便にて羨敷存候」(明治三十三年十月八日付鏡子宛書簡)と語られている。漱石は「清潔」という行き届いた「衛生」を通して文明としての近代を目にし、その結果「羨敷」さを感じる。それは、漱石の中にすでにそのような文明意識が根付いていたということであろう。

当地のもの一般に公徳に富み候は感心の至り汽車杯にても席なくて佇立して居れば下等な人足の様なものでも席を分つて譲り申候日本では一人で二人前の席を領して大得意なる愚物も有之候(略)是等の輩を少々連れて来て見せてやり度候(明治三十三年十二月二十六日付鏡子宛書簡)

漱石の表現を借りていえば「下等な人足の様なものでも」「公徳に富」んでいたのはむしろ人間における対社会意識の伸張の表現で、近代的秩序意識の結果である。そのような状況を日本人に「見せてやりた」と思うのは漱石が近代主義者になりつつあるということを示しているといえるだろう。

此国の文学美術がいかに盛大で其盛大な文学美術が如何に国民の品性に感化を及ぼしつつあるか此国の物質的開化がどの位進歩して其の進歩の裏面には如何なる潮流が横はりつつあるか、英国には武士といふ語はないが紳士といふ言葉があつて如何なる意味を持つて居るか、如何に一般の人々が鷹揚で勤勉であるが色々目につくと同時に色々癪

に障る事が持ち上つてくる。時には英吉利がいやになつて早く日本へ帰り度なる。すると日本の社会の有様が目に浮かんでたのもしくない情けない様な心持になる。日本の紳士が德育、体育、美育の点に於て非常に欠乏して居るといふ事が気にかゝる。(『倫敦消息』)

「文学美術」が「国民の品性」に「感化」を及ぼしたとすれば、それはむしろ近代国民国家システム成立以降においてである。むしろ「勤勉」なる徳目もまた、近代以降、時計の普及とともに人々が新たに身に付けた感覚である。漱石が「日本の社会の有様」を「情けない」ものとしているのは「德育、体育、美育」という面において「欠乏」していると感じているからだが、そのような「欠乏」感覚が、イギリス「西洋」の状況を「進歩」した状況として眺める近代主義・発展主義的なまなざしであることは言うをまたないだろう。

おそらく漱石のイギリス嫌悪は、自らを常に「欠乏」していて「立ち遅れている」存在として意識せねばならなかったことから始まっている。すなわち、対象をつねに自らとの比較において眺め、羨望し、追い付くべきとした近代主義的視点によるものだったのである。 当時はダーウィンの影響もあって、「欧州の事物を本質的に進歩的とみなし、非欧州の事物を本質的に未開と決め付ける偏見が幅を利かした」(エマニュエル・ウォーラーステイン『ポストアメリカ：世界システムにおける地政学と地政文化』227 - 249頁、藤原書店、1991・9)とされるが、そういう意味では漱石もまたそのような「偏見」のなかにいたのである。

しかし、勝つ見込みの見えない競争意識は疲労感を伴うだろう。さらには実際に漱石がそうであったように対象に対する「嫌悪」も引き起こすだろう。漱石が陥っていた自己嫌悪が劣等感にその因があるのは言うまでもないのだが、そうさせていたのがほかならない漱石自身の近代主義によるものであることはもっと注意されていい。漱石は文学論のための「ノ・ト」の中で「西洋」と日本の開化の比較をしながら、日本は自分なりの道を行っていたのが急に西洋が行っている道と一緒に走ることになったのだと語っているのだが、一緒に走ることにはむしろ漱石自身が望み、容認したものと見るべきである。換言すれば、<西洋>という他者を「日本」と同一線上のものと認識し<追いつく>べき対象と考えはじめたことにこそ、以後のすべての憂慮、そして「神経衰弱」までもが準備される要因があったのである。

三、創られるナショナル・アイデンティティ

漱石が倫敦で「黄色い」自己を認識したことの叙述は、<自己>認識なるものが他者の存在によってはじめて可能になるものであることを明確に語っている。

此煤煙中に住む人間が何故美しきや解し難し。思ふに全く気候のためならん、太陽の光薄き為ならん、往来にて向ふから背の低き妙なきたなき奴が来たと思へば我姿の鏡にうつりしなり。我々の黄なるは当地に来て始めて成程と合点するなり。(明治三十四年一月五日付日記)

すでに人口に膾炙しているくだりだが、ここで注目すべきはその劣等感よりも「我々の黄なる」事実が「当地に来て始めて」「合点」させられたものだったということである。漱石はむろんイギリスで初めて西洋人と称される白人に接したわけではない。すでに日本において西洋人に接しているにもかかわらず「我々の黄なる」ことに気がつかなかったとすれば、それは「西洋」という他者が「他者」として意識にのぼることがなく、さらに言えば「比較」の対象として焦点を結ぶことがなかったため、「自己」なる存在へ認識を馳せることがなかったということを証明しているはずである。

同じことを漱石は手紙でも書いていて「当地に来て観れば男女とも色白く服装も立派にて、日本人はなるほど黄色に観え候。女杯はくだらぬ下女の如き者までも中々別嬪有之候。小生如きあばた面は一人も無之候(注1)」(明治三十三年十月二十三日付鏡子宛書簡)「日本に居る内はかく迄黄色とは思はざりしが当地にきて見ると自ら己の黄色なるに愛想をつかし申候。」(明治三十四年一月二十二日付鏡子宛書簡)と語る。

<自己> 主体は、他者に出会って始めて意識される(注2)。そして漱石の場合、その自己なるものは力の(あるいは美醜の これまた主観的なものにすぎないのだが)つまり自己の有する武器の力の強弱(これもまた主観的なものにすぎないが)において測られていた。それは別の相手との比較においてはその感じ方が変わりうるという点で、変則的で流動的なものである。黄色人種と黒色人種間の比較なら、黄色は「白」に感じられたろう。その判定と優劣の判断は恣意的であるほかなく(注3) 当然ながら時代や共同体の価値観によって違ってくるはずだ。

黄色いことを劣ったものと認識するには白いことに対する憧憬が必要である。実際漱石

のテキストには「西洋人は美しい」(「三四郎」)というような発言に現れるような白色賛美というべき叙述がたびたび見られ、西洋人による自己讃美を内面化していたことがわかる。

しかし、「西洋」との出会いの最初の頃は日本人にとって西洋は決して「美しい」ものではなかった。一八〇〇年前後まで、オランダ=西洋人たちは日本において「動物」に近いイメージをもたれてもいたのだが、それは一般人のレベルにとどまるのではなく、たとえば平田篤胤のような国学者 知識人も西洋人の外見や行動に関して「犬」のようだと書き残していたのである(注4)。

もっとも、漱石自身、そのような見方についてつぎのようなメモを残している。

日本人ガ西洋人(全体)ヲ評スル美学上ノ標準ハ元来西洋人ヲ一度モ見タコトナキ時ニ養成サレタル標準ニテ好悪ノ判決ヲナス。髪赤シ醜、眼碧醜、背アマリ高シ醜等ナリ。
(「ノート」 - 20 Poetical Diction)

そして漱石は「此醜ト見傲ス諸点中ニアル美ヲ発見スベク perception ガナラサレテ居ラズ從ツテ此 perception ニ伴フ実感ヲ有セズ従来ノ美感ヲ起スベキ objective categories 中ニ存在セザル者ヲ見テ categories 中ニナキ故醜トシテシマフナリ」(同)としている。しかし、それは美のカテゴリに西洋の特徴が入っていなかったゆえのことではない。というのも、たとえば黒人は開化後も美しいものと認識されることはなかったのだから。

日本人にとって「西洋」が「美しい」ものになったのは、ほかならぬその「文明」の力、「文明」を賛嘆させた近代帝国主義の時代以来のものだったと言うべきであろう。そういう意味では漱石の劣等感もまた、近代的なものだったのである。

四、「欠如」としての西洋

しかし、漱石はやがて劣等感から抜け出し、さらには西洋を批判するにいたる。たとえばイギリス人の家庭に招待されるというような親切を受けながらも「外国人の然も日本人を一度も逢つたこともないのに‘at home’に呼ぶなんて野暮」(明治三十四年二月二十一日付日記)であり、「義理」で呼んだのだとしつつそのことを根拠に「西洋社会は愚な物」(同)とまで断定するようたくましさ その判断の是非はおくとして も見せているの

である。

ほかにも漱石はクレイグ先生に英文の添削に対する授業料の割増を求められて「卑シキ奴ナリ」(日記)と書いている。それは実は、当地においては当然のことで漱石の断定は「社会的習慣の相違にともなう誤解」(出口保夫、アンドリュー・ワット編著『漱石のロンドン風景』、研究社出版、1985・8)だったのだが、他者の「習慣の相違」を考える想像力を持ち合わせていなかった漱石にとって、そのような独断が終生イギリスぎらいになってしまったことと無関係だったとは言えない。その是非はともかくも「住みなれぬ処は何となくいやなものに候」(明治三十四年一月二十二日付鏡子宛書簡)というような、「なれぬ」ことへの拒否反応を漱石が持っていたことも確認しておくべきだろう。

慣れている物・人に心地よさを感じることも自体が問題なのではない。ただ、そのような心地よさの追求が、漱石の場合、イギリス嫌悪と敵対意識を呼び起こしていたことは確認しておく必要がある。それはときに、他者の排除につながる危険性をも孕むのである。漱石は、人に挨拶をされても「金を貰ひたいのだ」(明治三十四年二月二十五日付日記)というように過剰に<意味>を読み取ろうとする。言うならば聡明な漱石は常に<解釈>の呪縛にとらわれていたのである。他者の挨拶が実際に「金」目当てのものだったかどうか自体は問題ではない。そのように対象の<意味>を読み取ろうとすることこそが漱石の<病>だったのである。のちに「考える」ことの苦痛を訴える主人公を漱石は小説に登場させているが、そこにおける苦痛に似た警戒心が、漱石においてはもっとも遠い他者であったはずの西洋人に会ったときにもっとも強く発動されていたといってもいい。そして、漱石テキストの「考える」「男」たちが、他者との関係作りにことごとく失敗していたことも想起しておいていいだろう。

西洋とのさまざまな「差異」に気づき、そのことを強調しながらも慣れないこと - すなわちそれまでの趣向や感覚が受け付けられないものを、漱石はやがて何らかの<欠如>、あるいは劣ったものとして認識するようになる。

西洋人ハ執濃イコトガスキダ華麗ナコトガスキダ 芝居ヲ見テモ分ル食物ヲ見テモ分ル建築及飾装ヲ見テモ分ル夫婦間ノ接吻ヤ抱キ合フノヲ見テモ分ル、是ガ皆文学ニ返照シテ居ル故ニ洒落超脱ノ趣ニ乏シイ出頭天外シ觀ヨト云フ様ナ様ニ乏シイ又笑而不答心自閑ト云趣ニ乏シイ。(明治三十四年三月十二日付日記)

あるいは、ほとんど似たような内容を語る次のようなメモ。

日本人ノ座敷ノ瀟洒ナルヲ見ヨ。西洋人ノ drawing room ノ如何ノ雜然トシテ如何ニ
物欲シソウナルカヲ見ヨ。西洋ノ裝飾ヲ見ヨ、西洋ノ料理ヲ見ヨ西洋ノ交際を見ヨ、西
洋ノ愛を見ヨ。(ノート)

他者の差異を、「欠如」として認識してゆく漱石の理解が、慣れたものへの絶大な信頼
に基づいていることは確かである。ともかくも、はじめ「広大」な世界として認識された
<西洋>は、こうしてやがて<欠如>の感覚でとらえられるようになり、さらには次に述
べるように過剰な自己尊大意識を呼び覚ますことになるのである。

ここであらためて、漱石がみたイギリスがどのようなものだったのかを確認しておこう。
漱石がいた一九〇〇年前後をはさむ一八九〇年から一九一〇年頃までの二十年間はまさに
イギリスの黄金時代であった。文明の象徴ともいわれる鉄道網は一九〇〇年までには完成
されており、鉄道の時代といわれるヴィクトリア時代の中心はロンドンにあった。町の外
観も「一八五〇 - 六〇年代にはほとんど今日見るような建築物がすでに完成を見ていた」
(出口保夫、前掲書 6 頁) のである。当然ながらイギリス人は誇りに充ちていて、ある面
では「俗物的な」(同) 顔をみせてもいた。

漱石の嫌悪はむろんそのような「誇り」がもたらしたであろうイギリスの東洋輕蔑によ
る部分もあったはずである。しかし当時の日英関係はどちらかというところと良好であった。そ
して 出口によると「日本の留学生に対して好意を寄せすぎる傾向は見られても、ロンドン
の一般市民をも含めて、漱石に対して「むく犬の如く」(「文学論序」) 冷酷無情に接した
人間はいなかったはず」だった。出口はまた「そうした印象があったとすれば、それは漱
石の神経症的な被害妄想によるものであったと断言できる」とも語っている。そして、そ
のような「神経症的な被害妄想」(同)は、漱石自身の自己尊大意識にその因があったので
ある。

洋行中に英国人は馬鹿だと感じて帰つて来た。日本人が英国人を真似るへと云ふの
は何を真似ると云ふのか今以て分らない。(明治三十九年十月二十三日付狩野亨吉宛書
簡)

富山太佳夫は漱石のイギリスへの感情を「敬意と軽蔑の同居」(富山太佳夫「漱石と英吉利 どのイギリス?」、『漱石が分かる』、朝日新聞社、1998・9)とするが、実際には「敬意」から「軽蔑」へと変わったと見るべきである。漱石が以後、小説や講演で繰り返し、いわゆる「文明批判」と言われるようになる西洋批判とそれを「まねる」と考えた日本批判を登場人物たちの口を借りて語らせることになるのもそのことを語っている。

田中優子は、禁教令下の日本に潜入した最後の宣教師ジョバンニ・バッティスタ・シドッチの尋問に関して新井白石が書き残した文献「西洋紀聞」(一七一五)を分析し、白石がさまざまな面でシドッチに傾倒していたにもかかわらずたとえばキリスト教に関して話す部分に関しては「西洋人は物質は自分たちより分かっているが(だから、学ぶ価値があるが)精神文化は甚だ軽蔑すべき状態だ(だから学ぶ価値がない)と考えていた」(田中優子、前掲論文)と興味深い指摘をしている。後に「自己本位」の思想で武装することになる漱石もまた、構造的には似たような思考の持主というべきだろう。

実際に「ノート」のなかにも、西洋は「外貌ノ美」を重視するのに「東洋ニテ八古来心ノ美ヲ重ンズ」というような言葉が見られる。

神経衰弱は十九世紀の共有病なり。人智、学問、百般の事物の進歩すると同時に此進歩を来たしたる人間は一步一步と退廃し、衰弱す。(略)他日もし神経衰弱の為に滅亡する国あらば英国はまさに第一に居るべし。(略)愚なる日本人は此の病的なる英人を学んで病的なるを知らず。好んで自殺を遂ぐるにひとし。英国の文学は、浅墓なるものなり。蛙の足に電気を通じてピクへさせたる如きものなり。巾着切りの文学は衰亡の文学に相違なし。天下に英国人ほど高慢なる国民なし。支那人は呑気の極鷹揚なるなり。(明治三十八・三十九年「ノート」)

漱石は、「神経衰弱」を「イギリス」にみいだし、「病的」「退廃」「滅亡」「衰弱」「衰亡」を語ってはばからない。決して「イギリス的ものこそが到達すべき価値として彼を拘束」(富山)するような状況はなかったのである。

富山は同じ文献の中で漱石にはイングランドとスコットランドの関係も見えてなかったとしながら「国家としてのイギリス」や「文化としてのイギリスとは何かという問いに彼は答えることができなかつた」と指摘しているが、おそらく漱石には「文化としてのイギリス」という発想はなかつたと言うべきであろう。むろん、漱石はイギリスを題材に作品

も書いていれば、様々な画や芝居を楽しんでいる。しかし、いわゆる「文化」を他者とのコミュニケーションを助けるものとするならば、そういう意味での「イギリス文化」は漱石の中にはなかった。漱石に見えていたのは、文化であれ慣習であれ人であれ常に「日本」との優劣比較判断の対象でしかなく、そういう意味でも「他者」としての「イギリス」はなかったのである。

西洋と日本とは道德上の觀念非常の差あり仮令語学の稽古なりとて日本従來の徳義と衝突する様な本を講読して平氣なるときは生徒は何時しが書中の思想に感化せられ遂には日本人の胸に西洋人の首がつきたる如き化け物を養成するに至るべし是は深く注意すべき事にて元來中學生徒などは外國語を修むるに當り此は向來高尚なる學問をなすの方便故不得已入らざる時間を捧げて之を修むる者ぞといふ事に気がつかず只其課目時間の他よりも多きを見且世間にて洋語の持て囃さるゝを聞く故此課目自身がかく迄に大切なる者と心得果は書中に如何なる事柄あるも之を貴重するの念を起すに至るなり（「中学改良策」より、第三篇「中学改良策」第三「生徒の改良」、明治25・12）

すでに早くから、漱石は「西洋」と「日本」をまず「差異」において見ようとしていた。道德観がちがっているので英語の本を読んで「日本従來の徳義と衝突」するようなことがあってはならない。影響されるような者がいていわゆる「日本」人を逸脱するようなものがいたらそれは「化け物」でしかない。そもそも漱石にとって外国語 英語は他者を知るためのものではなく「高尚な學問をなす」ための「方便」でしかなかった。「故に教科書は尤も選択せざるべからず」で、「日本西洋風俗の差を指摘し生徒をしてかかる思想に侵染せられざる様心掛くべし」と漱石は強調してもいたのである。次の文は、イギリスへの航海中、同乗した人の多くはイタリあるいはパリ博覽会に行きたがったが、漱石はそれらの国にあまり関心がなかった様子を示している。

併し夏目君は以太利觀光に熱心と云ふ訳でもなし、博覽会も強いて見たいと云ふ風でもなかつたらしい。唯目的地の倫敦へ行くには巴里を経由するが一番便利である。そこで初めから其積りで巴里でも二三人の人に面会する予定だつたらしい。けれども若し一行の多数意見が以太利見物に傾いたら、夫れにも反対を唱えなかつたらうと思はれる。兎に角君は航海中始終超然主義とでも云ふ様な態度を執つて居た。（藤代素人「夏目君

の片鱗」)

漱石が、西洋において、そこにいる「人」「文化」を見ることに熱心でなかったというこの証言は、漱石に単に好奇心が不足していたのではなく、「化け物」になることを警戒してのことだったというべきだろうか。漱石は、イギリスの「ひとつのものを時に愛し、時に嫌悪したのではな」(富山、前掲論文)い。「敬意」が「軽蔑」に変わったように、「愛」は総じて「嫌悪」に、最終的に変わっていたのである。「文学論序」はそのことをもっとも明確に見せてくれている。そもそも漱石は、「洋行の希望を抱」いたことなどなく、倫敦での生活は「尤も不愉快の二年」で、「英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活」でしかなかったと、二年にわたるイギリス生活をまとめているのである。

倫敦の人口は五百万と聞く。五百万粒の油の中に、一滴の水となつて辛うじて露命を繋げるは余が当時の状態なりといふことを断言して憚らず。清らかに洗ひ濯げる白シャツに一点の墨汁を落したる時、持主は定めて心よからざらん。墨汁に比すべき余が乞食の如き有様にてアストミンスターあたりを徘徊して、人工的に煤烟の雲を漲らしつゝあるこの大都会の空気の何千立方尺かを二年間に吐吞したるは、英国紳士のために大いに気の毒なる心地なり。謹んで紳士の模範を以つて目せらるゝ英国人に告ぐ。余は物数奇なる酔狂にて倫敦迄踏み出したるにあらず。個人の意志よりもより大いなる意志に支配せられて、気の毒ながら此歳月を君らの麵麩の恩沢に浴して累々と送りたるのみ。二年の後満ちて去るは、春来つて雁北に帰るが如し。滞在の当時君らを手本として万事君らの意の如くする能はざりしのみならず、今日に至る迄君らが東洋の豎子に予期したる程の模範的人物と能はざるを悲しむ。去れど官命なるが故に行きたる者は、自己の意思を以て行きたるにあらず。自己の意思を以てすれば、余は生涯英国の地に一步も吾足を踏み入るゝ事なかるべし。従つて、かくの如く君らのお世話になりたる余は遂に再び君らのお世話を蒙るの期なかるべし。余は君等の親切心に対して、其親切を感銘する機を再びする能はざるを恨みとす。

それにしてもある対象に対して、この文章ほどに憎悪に近いともいうべき、皮肉に満ちた複雑な感情をあらわにしたことが漱石はほかにあつただろうか。それは単に「個人的な

不適応性) (出口保夫「漱石のロンドン」、『理想』622号、1985) ゆえのものではない。漱石は「貧乏」暮らしを嘆いていたが、実際は出口によると下宿の人は親切で、食事も良好だったという。客観的にみて漱石は「哀れ」な状況にいたわけではなかったのである。

それにもかかわらず「油」の中の「水」が白シャツに落ちた「墨汁」のイメージで自己を捕らえてしまう漱石の文章は漱石においてイギリスへの親和がついに不可能であったことを語る。繰り返すが、漱石が親和を見せているのはわずかな自然や芸術のみで、そこにある生身の「人間」に対して親和を表明したことはまれである。そして、漱石が自己を決定的に遊離した存在としか考えられなかったのは先に見たように、<意味>の呪縛に囚われさせる警戒心と、相手を競争の対象としか考えない自己尊大意識ゆえのものだったのである。「文学論序」を「後進国」の年若い市民にふさわしい「世界的野心」の表現としたのは滝沢克巳だったが(『夏目漱石』37頁、昭和23・8)それは、もっとも妥当な批評だったといわねばなるまい。

それにもかかわらず、漱石のイギリス嫌悪はとかく正当なものとして受け入れられてきた。たとえば伊豆利彦が「英国人に対してとった憎悪にも似た、挑戦的ともいうべき態度はロンドンの生活で彼が感じた劣等感に発する」(「漱石と西欧」、『漱石と天皇制』165頁、有精堂、1989)としながら、「劣等感」から抜け出ようとして「ひたすら西洋をありがたがり、西洋人を模倣しようとするのは、普通多くの留学生が辿る道である」のだが「漱石はその道をとらなかった」とするのは、その代表的な言説と言えるだろう。それは「劣等感」を当然のものとし、またそれに打ち勝とうとして「きれい」になったことをも正当化している。またこのような意識の構造は現代においても見られることである。

漱石のイギリス体験は「西洋」を「墮落」(『虞美人草』)の場所と認識する道程であった。墮落の場所の文学を研究し教えることが魅力であったはずもなく、留学も終わりに近づいたころ漱石は英文学者になるのはつまらないので「何か人のためや国のために出来さうなものだとぼんやり考え」(明治三十四年六月十九日付藤代禎輔宛書簡)るようになる。

アンソニー・ギデنزは、「近代」とはそれまでの共同体から離たれる時代であったがため、他者や専門集団にたいする「信頼」が必要な時代だったと言っている。漱石は、ギデنزのいうところの「信頼」の行為者にはならなかった。しかし、「関係性とは信頼に基づいたきずなであり、その場合、信頼は、所与のものではなく、働きかけるものであり、またそうした働きかけは<相互の自己開示過程>を意味している」はずだ(アンソニー・ギ

デズ『近代とはいかなる時代か モダニティの帰結』151頁、而立書房、1993・12）。漱石の倫敦テキストは、漱石がこのような「信頼」を西洋という他者に示すことがついになかったことを示す。そして、単に「西洋」という他者のみに限られることはなかったそのような漱石の性向は、以後漱石文学のほとんどにおいて顔を出すことになるのである。

注

1) 漱石は、「黄色」いことだけでなく自分の「あばた」にも触れているのだが、当時「あばた」は西洋においてはすでに姿を消しつつあった。種痘は、周知のようにイギリスの医師ジェンナーが十八世紀末に発明したもので、「日本では一八一二年に中川五郎治がシベリアから持ち帰り、一八二四に北海道で試みた」が、広く普及したのは一八四九年以後のことである。(古河歴史博物館編『病よされ 悪疫と呪術と医術』平成13・10)。漱石は予防接種を受けているが、その事後手当てを間違っていた点では(『吾輩は猫である』参照)「文明」の恩恵をまだ受けてない後進国の者として自己を認識していたのではないか。

2) 酒井直樹『日本思想という問題』(岩波書店、1997・3)ほか参照。

3) 小坂井敏晶は、「人種」の区別を目の色などほかの基準でなく皮膚色に基づいてするようになったこと自体が「恣意的」だったとしている(『民族という虚構』、東大出版会、2002・10)。

4) 田中優子「江戸時代の外国人像」(平川祐弘編『内なる壁：外国人の日本人像・日本人の外国人像』、TBSブリタニカ、1990・7)